

## 岡倉覚三のオペラ台本 “The White Fox”（『白狐』）をめぐって

清水 恵美子

岡倉覚三（天心）は、1913年アメリカ合衆国ボストンにおいて英語で三幕もののオペラ台本『白狐』を執筆した。彼はボストンの有力者イザベラ・S・ガードナーにタイプ稿を献呈し、音楽家チャールズ・M・レフラーが作曲を担当した。岡倉の書簡、当時のボストンの音楽的状況、ガードナーやレフラーのボストン・オペラ・カンパニーへの影響力を考慮すれば、『白狐』はボストンでの上演を前提に執筆されたものと考えて良い。だが日本の信太妻伝説を基にしながら、アメリカ人観客が理解し、感動し、楽しめるようなオペラを創作するには、上演時の効果や観客の反応を考慮して執筆する必要があったはずだ。このような観点で『白狐』を分析すると、歌舞伎の様式を取り入れた場面と、ヴァーグナーの『タンホイザー』と類似する場面が浮かび上がってくる。そこで本報告では『白狐』と歌舞伎やヴァーグナーのオペラ作品との類似性を検討した上で、岡倉がそれらの要素を取り入れた意図を推察し、『白狐』執筆の意義について考察する。

まず『白狐』には①曲書、早替り、宙乗りなど歌舞伎のケレンを活かすことのできる場面、②子別れの場面での狐コルハの歌詞と狐母の詞章における構成、内容、表現の相似、③小袖物狂いに相当する場面でのヤスナの歌詞と舞踊『保名』の詞章における内容の相似が認められる。このことから、岡倉が歌舞伎『芦屋道満大内鑑』や歌舞伎舞踊『保名』、あるいはほかの歌舞伎の趣向や様式を参考にしながら執筆したことが推察できる。歌舞伎の演劇様式をオペラというフレームにはめ込んで活かした新しいタイプのオペラは、娯楽性をより高め観客を楽しませることができる。それと同時に歌舞伎という日本の芸能を、既存のオペラとは異なる演劇様式として観客に味わわせることが可能となる。そこに岡倉がオペラの演出に歌舞伎を活かそうとした意図が見いだせる。

また岡倉が『白狐』執筆時に『タンホイザー』を参考にした可能性は、岡倉の鑑賞体験に加え、両者にお

ける①舞台設定の場所や時代、②巡礼たちのコーラスの歌詞、③救済のテーマと登場人物の信仰、④ヒロイン像に相似や共通性が認められることから考えられる。西洋芸術の様式に則りながらも、日本の宗教を伝達可能なオペラを生み出すという困難な作業に取り組んだとき、岡倉は『タンホイザー』を観客の理解を促す媒介として『白狐』に取り入れたと推察できる。それは当時の欧米においてヴァーグナーの影響が大きかっただけでなく、岡倉が『タンホイザー』で描かれた人々の救済への祈りと聖母信仰に、日本人の生活に根ざした宗教と同じ心性を見出したからであろう。

このように『白狐』に内在する歌舞伎や『タンホイザー』の要素からは、相似を介してアメリカ人観客に、母親の情や信仰という世界共通の芸術主題に共感させつつ、日本の芸術や宗教を理解させようとする岡倉の試みが看取できる。当時は異国オペラが流行し、岡倉にはそれらのオペラによって広まる日本の誤ったイメージを払拭したいという思いもあっただろう。『白狐』なら異国オペラのブームを逆に利用して、欧米人が求める日本ではなく、日本人として伝えたい日本を発信することが可能である。『白狐』は、アメリカ人に日本文化をより広く伝えるための手段となりうるオペラであった。そこに岡倉がボストンでオペラ台本『白狐』を執筆した意義を見出すことができる。

しかし『白狐』の持つ西洋文化との相似性は、『白狐』が上演されても結局アメリカ人はその相似性を理解するのみで日本文化そのものを理解しない、という事態を引き起こす可能性をはらんでいる。岡倉の創作意図とアメリカ人の受容とのギャップの問題は、今後の課題としたい。

なお、今回の報告は『比較文学』第49巻（日本比較文学会、2007年）に「岡倉覚三のオペラ台本“*The White Fox*” — 内在する歌舞伎とヴァーグナー —」として掲載される拙論の概要となる。論考の全体については掲載誌を参照されたい。